

地域教育情報紙

山梨県教育委員会
中北教育事務所
地域教育支援スタッフ

中北.com

チュウホクドットコム

6

編集・発行 中北教育事務所 地域教育支援
担当：深澤 隆二・雨宮 靖子

〒407-0024 韮崎市本町4-2-4
電話 0551-23-3046
FAX 0551-23-3013

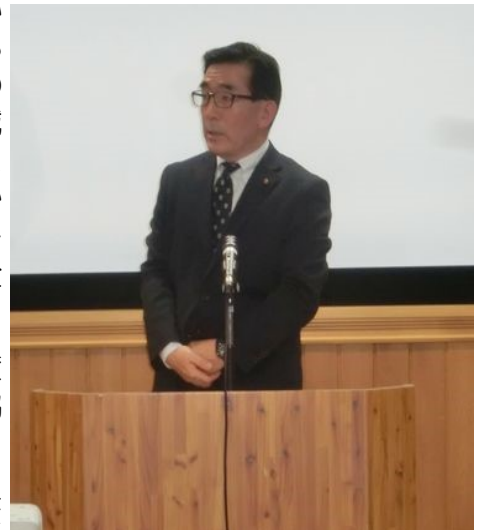
中北の地域社会 (community)の心の交流 (communication)をめざします

学校・地域・家庭の教育力向上のために

～第2回地域教育推進連絡協議会 開催～

1月30日（木）、北巨摩合同庁舎において、太田充昭和町教育長、小林仁甲府市教育長、小林新吾中北教育事務所所長など各役員出席のもと、第2回中北地区地域教育推進連絡協議会が行われました。協議会の冒頭、会長である太田充昭和町教育長から中北地区の家庭・学校・地域における教育への日頃からの理解と協力に対し感謝の意が表明されるとともに、現在子どもを取り巻く環境は依然厳しいものであること、だからこそ家庭・学校・行政・青少年育成団体など子どもに関わる団体が一つになって行われる本協議会の活動を通じ、子ども理解を図り、地域全体で子どもの健全育成を目指していくことの重要性が訴えられました。

その後事務局からは、地域教育の推進のために本協議会が令和元年度に行ってきた事業経過が報告されるとともに、来年度の事業計画案や協議会役員案などが提案されました。



太田 充 会長



また、甲府青年会議所の三澤真人副理事長からは「一般社団法人甲府青年会議所 2020年度青少年育成事業 山の都 (Collaborations World(コラボレーションズ ワールド))」の情報提供がありました。三澤副理事長によれば、これは山梨の魅力を体験・再発見し、その体験を題材にしたミュージカルで、このミュージカルを仲間とともに作り上げることで地域に対する愛郷心を高めるといふ狙いがあるとのこと。

三澤真人 甲府青年会議所副理事長

令和元年度2回目となる今回の地域教育推進連絡協議会にも、幼稚園や保育園、小中高等学校などの学校関係者、各市や町の教育委員や青少年カウンセラー、学校PTA関係者など、100名を超える方々が参加し、会場は満席となりました。その様子から、参加者それぞれが、未来を担う子ども達の教育に対する責任を担い、地域全体で子ども達の健やかな成長を支えていこうという強い意気込みがうかがえました。



小林 仁 副会長

中北.com no.6 コンテンツ

p1 第2回地域教育推進連絡協議会

p2 第2回地域教育推進連絡協議会 講演会

p3 甲府工業高校、穂坂小

p4 敷島南小学校、しらかば保育園・みのる荘



共に輝き続けるために～脳と心を育てる～

～第2回中北地区 地域教育推進連絡協議会～

山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科 教授 坂本 玲子 氏

令和元年度 第2回中北地区地域教育推進連絡協議会では、山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科教授 坂本玲子先生にご講演をいただきました。坂本先生は、静岡県のご出身で、早稲田大学を卒業されたのち、山梨大学医学部の前身、山梨医科大学に入学され、医師免許を取得し医学博士とされました。山梨医科大学看護学科や健康科学大学、英和大学でも講師として活躍され、現在、山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科の教授をされておられます。今回の講演では精神科専門医としてのご勤務、発達障害者支援体制整備検討委員会に所属されながら、認知療法やアドラー心理学、睡眠・発達障害に関する研究を続けていらっしゃる坂本先生に、「共に輝き続けるために～脳と心を育てる～」と題し、脳科学という観点から子どもの発達や言葉がけのポイントなどについてお話いただきました。以下はその要旨です。



1. 子育ての目標は、子どもの自立

「私には問題を解決していける力がある。仲間と一緒に力を合わせて未来を作っていける。人生を豊かに楽しみ、命を愛し、命を育てるためにできるだけのことをしよう」「人は完全ではない。しかし信じていこう。希望をつなぐ力が人間にはある」と思えることが子どもの自立のためには必要。そして、そう思える子どもに育てていくことが子育ての目標。今は母子の関係が密接で、自立していかなければいけない年齢でもなかなか離れられない。子ども達は親を完全に当てにしている、親の方も離れて欲しくないと思っている。しかしそれではいけない。子どもがきちんと自立するよう、10歳になるまでに子どもの自立度を高めておかなければならない。そして10歳で「子育て終了宣言」。その後は「命に代えがたい親友」みたいな感覚で、丁寧な言葉で親子で話す。そうすることで適度な距離がとれ、良い関係性が築ける。

2. やわらかい脳の発達

人間が悩んだり、疲れたりするのは、脳の前頭葉を使うから。人間の前頭葉はサルの3倍あって、人間が人間らしい部分である。ここで大事なのが海馬と扁桃体。海馬は、記憶を司っている一方、脳の他の部分と違って、生き方次第で新しく生まれ変わらせることができる。扁桃体は不安や恐怖などの感情が生まれる場所であり、ストレスがかかると体調不良などの身体症状を引き起こす。また海馬と扁桃体は近接し常に情報が行き来しており、嫌なことの方が楽しいことより記憶されやすい。そして一度嫌なことを体験すると、またそうなるんじゃないかと不安になり、体にも変調が起こる。しかし脳に関してだけは、自分でデザインが可能。だから脳の使い方次第で、どの年代も幸せになれる。また脳科学者によれば、組織的な行動をとることで脳は大きくなったという。だから子ども達の脳の発達のためには群れ行動が大事。一方、モンゴロイドである日本人の脳は、アメリカ人などのコーカソイドの脳より大きく、そのため日本人はゆっくり大人になると言える。だから脳的には30歳までが思春期。思春期であると言える父母が子育てをしているのだから、大変である。

3. 地域共同体の大切さ

日本の子ども達は、大家族で生活するのに適している。メンバーがたくさんいれば子どもはよく育つ。一人で育てると親子ともに大変。だから家族が少ない場合には、地域が家族代わりになればいい。しかし現代はこれが難しい。子どもはいろいろな場所に居場所があれば健全に育つ。親にはできないことがあるからこそ、地域で子どもを育てることが大切になる。

4. たくましい心を育てる

「ありがとう」「うれしい」といった言葉をたくさん使おう。そして相手のいいところに注目する。短所も見方を変えれば長所になる。親は子どもをほめるときは、その内容に注意する。勝ち負けではなく、貢献をほめると良い。成果を重視するより過程を、他者との比較より個人の成長を重視し、成功だけを評価するのではなく、失敗をも受け入れ賞賛し、叱咤激励するより感謝し共感する。そうすることで子どもは勇気づけられる。

坂本先生の講演を楽しみに来た参加者で会場は満席となり、講演会終了後には「学校の子供達にどう接していったらいいか、非常にいいヒントを得た」「どんな言葉を使うかということを考えることの大切さが確認できた」などといった感想がたくさん寄せられ、参加者それぞれが多くの示唆を得た講演会となりました。

地域の希望となり未来となるエンジニアを目指して

～甲府工業高校SPH事業成果発表会～

大正6年の創設から100年以上の長きにわたり、県内外の産業界に優秀な技術者を送り出し、平成29年度からは文部科学省指定スーパープロフェッショナルハイスクール（Super Professional High School；SPH）となった甲府工業高校が、1月10日（金）、令和元年度のSPH事業成果発表会を行いました。発表会では、機械科、電気科、建築科、土木科の4科連携による小水力発電機製作についての発表、電子科による自動ケーブル測長・切断機の製作についての英語によるプレゼンテーション、さらに合計37テーマにもわたる課題研究成果のポスターセッションが行われ、その質の高さから、同校がSPH事業を通じて育成を目指した3つの力、すなわちThinking（科学的根拠に基づいた論理的思考力）、Engineering（高度で実践的な技術力）、



校内SPH成果発表会

Challenge & Humanity（起業家精神と技術者としての人間力）が、着実に生徒一人ひとりの身につけている様子うかがえました。またポスターセッションでは、参加した多くの企業・大学関係者などからの質問に生徒達が丁寧にまた的確に回答する様子が見られ、日々の主体的な学習や課題研究・企業実習を通じ、高い技術とともに豊かな人間性も育成されていることがうかがえました。今後の社会では環境の保全やエネルギーの有効利用など、持続可能な発展のために多様な課題に高度な技術力をもって取り組むことが求められていくと言われています。卒業後の進路は、就職、甲府工業高校全日制専攻科、大学と様々ですが、地域や社会の発展に貢献したいという強い情熱を持つ同校の生徒達に頼もしさを感じた発表会となりました。



地域ぐるみで支える子どもたちの成長

～韮崎市立穂坂小学校ふれあい教室～

近年、超少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化などにより、子どもを取り巻く環境が大きく変化し、子ども達を健全に育成するためには、学校が地域社会と協同し、子ども達に学校や家庭以外のもう一つの居場所を作ること、また子ども達が教師や親ではない多くの大人と交流する体験を持つことが重要であると言われています。そんな中、1月19日（日）には韮崎市立穂坂小学校において、子ども達が親や祖父母たちとともに、ものづくりに挑戦するふれあい教室が開催されました。それぞれの興味に合わせて、和風や羽子板、お手玉や壁飾りなど、製作するものを選んだ子ども達は、家族とものづくりに挑戦。そんな家族を指導してくれるのは、穂坂地区にお住まいの大工さんや公民館の役員など、普段から子ども達を見守る地域のみなさんです。道具の名前や使い方などを教えていただきながら、「ものづくり」という共通の活動を通

じ、子ども達と地域の方々間に自然な交流が生まれていきました。多様な経験や技能、知識を持つ地域の方々とは穂坂小学校のこうしたふれあい教室は今回で26回目。子ども達世代は「風を作ったこともなければ、あげたこともない」などと語り、このふれあい教室が、多様な年代間の交流というだけでなく、日本あるいは地域に伝わる伝統文化の継承という側面も持っていることがわかりました。山梨県建築文化賞を受賞した木のぬくもりが感じられる校舎で、学校を核とした地域とのつながりが形成され、地域全体で子どもを健やかに育てるとともに、子ども達が地域への愛着を育てていく様子うかがえました。



多様な文化に触れる経験を

～甲斐市立敷島南小学校～



令和2年4月から、新学習指導要領のもと、小学校中学年には「聞くこと」「話すこと」を中心とした外国語活動が導入、さらに高学年には「読むこと」「書くこと」が加えられ、総合的・系統的に英語を学ぶ外国語科が導入されます。これは国際化が急速に進展する中で、外国語によるコミュニケーション能力の確実な育成が求められているためですが、一方で、環境問題に代表される地球規模の問題を解決するためには、国際的な協調が不可欠であり、そのためには確かな外国語運用能力の育成とともに、世界には多様な文化がある

ことを理解し、異なる生活様式や習慣を互いに尊重する態度が必要であると言われていました。このような中、甲斐市立敷島南小学校において、山梨県国際文化交流会による出前授業が行われました。授業を行ったのは、令和元年9月から山梨学院大学に留学し、政治行政を学ぶレドワ・アレナさん。日本語教育が盛んだというロシアのウラジオストク出身のアレナさんは、流ちょうな日本語でロシアの国土や、気候、そこに住む民族や言葉などについて、敷島南小学校の3年生に説明しました。月に10回ほど同校を訪れ、外国語活動の支援を行うジャマイカ出身のALT（外国語指導助手）サフィア先生とは異なる文化圏出身のアレナ先生の話に、児童たちも興味津々。質問コーナーでは、次々に児童の手が挙がり、「ロシアにはどんな楽器がありますか」「どんなスポーツがロシアでは人気がありますか」といった質問がとびました。総合的な学習の時間には、世界の国々について調べ学習を行ったという同校3年生。アレナさんとの交流が、世界のさまざまな文化についてさらに興味を高める体験となりました。



交流が育む心のバリアフリー

～北杜市立しらかば保育園～

1月8日（水）、北杜市立しらかば保育園の4～6歳の40名が、同保育園が設置されている高根町福祉村 みのるの里にある特別養護老人ホームみのる荘を訪れ、同ホームの入居者の皆さんと、蚕の成長や農作物の順調な生育を願って小正月に飾られる繭玉飾り作りを行いました。隣接して設置されたしらかば保育園とみのる荘が交流を始めたのは8年前。それから毎月、園児達はみのる荘を訪れて入居者の皆さんとふれ合うとともに、七夕やクリスマスなど季節のイベントについては、一緒に楽しむ交流を続けているといいます。当日も朝から園児たちとの交流を楽しみに待っていたみのる荘の皆さん。まずは到着した園児達が披露する元気いっぱいな遊戯に顔をほころばせます。その後は、園児とみのる荘のみなさんと一緒に繭玉となるお団子を作っていました。食用色素が混ぜられた粉からは、ピンクや緑のカラフルな繭玉が次々とでき、その華やかさに園児もみのる荘のみなさんも満足げ。できあがったお団子は蒸し上げられ、園児達によって上手に木の枝に飾られました。こうした異世代間の交流は、みのる荘のみなさんにとっては楽しみや喜びとなって心身の活性化が図られる機会となる一方、園児たちにとってはその成長の過程で、様々な心身の特性を持つ人々への理解を深め、心のバリアフリーを自然に育む経験となっています。「また来てね」の声に、明るく手を振る園児たちの様子から、異世代がともに過ごす時間が、お互いにとって貴重なものとなっていることがうかがえる交流会となりました。

